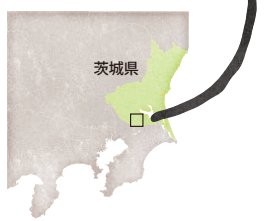


相撲部屋の生活と環境

相撲部屋は、力士たちが共同生活を営む「家」である。
 師匠と弟子であり、父と子でもある親方と力士の独特な関係。
 この特殊な生活様式の一端を、筆者のフィールドから紹介する。

松山 啓 まつやま けい / AA 研ジュニア・フェロー



式秀部屋の外観。1階が稽古場、2階が力士の生活スペース、3階が親方の部屋となっている。

相撲部屋との出会い

2016年6月、当時大学院に進学したばかりだった筆者は、国内で大相撲の人類学的な研究をしたいと考えて、フィールド調査が可能な相撲部屋を探していた。それまで、大相撲の本場所や巡業には何度も足を運んでいたが、相撲部屋には一度も訪れたことがなかった。なぜなら「部屋」という場所は、とてもプライベートな空間を連想させるし、



伝統的な大相撲の「内側」の世界に対して、どこか敷居の高さを感じていたからだ。そんな中、ある相撲部屋が、ネット上でちょっとした話題になっているのを見つけた。その相撲部屋は、稽古の様子をニコニコ生放送でライブ配信していたり、SNSを積極的に活用して、新弟子を募集したりしていた。そうした取り組みは、これまで筆者が抱いていた相撲部屋の古典的なイメージとは違い、非常に現代的で意外性があった。「ここなら調査ができるかもしれない」と考えた筆者は、早速、部屋に連絡を取り、朝稽古の見学に向かった。

筆者が訪れたのは、「式秀部屋」という茨城県龍ヶ崎市にある相撲部屋であった。午前8時、JR常磐線の佐貫駅（現在は龍ヶ崎市駅に改称）で降りて住宅街を歩いていくと、「式秀部屋」という表札が掛かった3階建の白い大きな建物が見えた。建物の前まで近づいていくと、ほのかに鬻付け油（力士の鬻を結うために使うすき油）の甘い香りが漂ってきた。筆者は少し緊張しながら、部屋の正面玄関を開けた。こには、と挨拶をすると、10代くらいの細身の少年が出てきて、「どうぞ上がってください」と言った。中に入ると、既に15人ほどの力士たちが土俵で稽古を始めており、手前の上がり座敷には、この部屋の長である式秀親方（元・北桜）が、稽古の様子をじっと見つめていた。稽古場は、力士たちの熱気と、汗と土と油の混じった独特な匂いと、殺気の漂う張り詰めた空気に支配されていた。相撲部屋との最初の出会いは、思わず背筋が伸びるような強烈な体験だった。

相撲部屋の歴史

ここから筆者は、式秀部屋でのフィールドワークを始めたのだが、その前に、そもそも相撲部屋とはどのような場所なのかを簡単に説明したい。現代における相撲部屋とは、日本相撲協会が力士の養成を委託する組織のことをいう。部屋を運営するのは、年寄名跡を保有する年寄（親方/師匠）



*写真はすべて筆者撮影。日本相撲協会、被撮影者の同意を得て撮影・掲載しています。



稽古の様子。

名古屋場所の宿舎で稽古を見守る式秀親方。



ちゃんこ鍋の調理の様子。この鍋はシンプルな醤油ちゃんこ。



式秀部屋の上がり座敷。現役時代の親方の鬘が飾られている。



行司が練習した相撲字。番付表の作成は行司が担当している。

で、力士を含めた行司(勝負の判定を行う人)、床山(力士の鬘を結う人)、呼出(取組で四股名を呼び上げる人)などの協会員は、各相撲部屋に所属する仕組みとなっている(筆者が遭遇した細身の少年は式秀部屋の行司であった)。

大相撲の興行体制は、基本的に江戸時代に確立したものであり、当時は多くの力士が大名に抱えられていた。次第に、興行主である相撲年寄が自ら力士を養成するようになり、明治以降、現在の相撲部屋の原型が形作られていく。このように相撲部屋とは、師匠と弟子が一つ屋根の下で稽古に励み、寝食を共にしながら生活する「家」のような場所であり、血縁関係はなくとも、父と子のような関係性(擬制的親子関係)で結ばれた職能集団である。したがって、相撲部屋の「家」制度には、少なくとも明治時代における家父長制をモデルとした当時の家族像を見出すことができる。相撲部屋の歴史を眺めると、一見して伝統的とされる生活様式は、意外にも明治時代に確立されたものであり、その内実は時代にに応じて常に変化を繰り返してきたことがわかる。

式秀親方の振る舞い

最初に取り上げた式秀部屋の積極的な情報発信は、時代に即した相撲部屋の在り方を模索する様子として、とても興味深いものであった。この部屋で筆者がフィールドワークを開始できたこと自体が、式秀親方のパーソナリティを表していると言っても過言ではない。その意味で式秀親方は、非常にユニークな人物である。現役時代は「北桜」として、十両優勝を経験するなど、幕内力士としても活躍し、豪快な塩撒きと真っ向勝負の相撲で人気を博した。引退後は、師匠の北の湖部屋で部

屋付き親方を務め、2013年に先代の親方から式秀部屋を継承した。ビーズ細工が趣味で、アナウンサーを巻き込んだNHKの相撲解説は、「元祖・アクション解説」と呼ばれている。

現役時代からファンサービスを大切にしてきた親方は、現在でも稽古見学に来たお客さんと積極的にコミュニケーションをとり、率先して会話を盛り上げる。さらに週末には、相撲部屋の土俵を使って、子どもの相撲教室を開催したり、地域住民を招いたちゃんこの振る舞い会を企画したりしている。部屋の支援者や地域住民との交流は、相撲部屋を継続的に運営する上で重要な実践である。このように相撲部屋の公私の境界は、その部屋を所有する親方の裁量によって柔軟に変化する。一方で、相撲部屋を生活の基本単位とする力士たちの暮らしとは、一体どのようなものなのだろうか。

力士として生きる

力士になるということは、相撲部屋で集団生活を始めることを意味する。力士間の身分序列は、入門順に決まり、「兄弟子」と「弟弟子」という関係から成り立っている。式秀部屋では、週に3~4日の稽古日があり、朝稽古は午前7時~11時頃に行われる。稽古が終わるとちゃんこの支度をして全員で昼食をとり、午後は昼寝の時間となる。

16時頃からちゃんこの準備に入り、18時に夕食、その後掃除や洗濯などをして、残りは自由時間となっている。

力士たちは、「関取(十両以上の地位)」を目指して、日々の稽古に励んでいる。大相撲の世界において、幕下以下の力士には給与が存在しない。その代わりに、彼らの生活費は、年6回の「場所手当」で賄われる。例えば、「序二段」の力士の場合、東京場所で7万7000円、地方場所で8万5000円が支給され、「三段目」の力士は、東京場所で8万5000円、地方場所で11万円が支給される。すなわち、番付下位の力士たちは、年間約48~59万円の収入をもとに暮らしている。ただし、家賃や食費、光熱費は、実質的に相撲部屋の負担であることから、基本的な生活は保証されている。また力士や相撲部屋には、「タニマチ」と呼ばれる^{ひい きやく}鬘賃客がつく慣習がある。彼らは力士を個人的に支援したり、食事に連れ出して御馳走したりする。着物を着た力士が、彼らと共に街を歩く姿を想像してみたい。すなわち、文化的な「シンボル」としての役割を果たすことも、食事の席で異次元の食いつぶりを見せることも、力士の大切な仕事なのである。

相撲部屋は力士の生活の拠点でもあり、様々な人が交わる交流の場所でもある。相撲を生業とすることは、相撲以外にも様々な能力が要求される。ある力士は、「俺たちはアスリートじゃなきゃいけない」と言いながら、「力士は男若者みたいなものですよ」とも言う。近年、COVID-19のパンデミックによって、後者のようなつながりには、一時的な断絶が生じた。再びちゃんこが振る舞われる日々は、戻って来るのだろうか。挑戦的な取り組みを続ける式秀部屋から、時代の要請に応じた新たな相撲部屋の在り方が、再び示されるのかもしれない。

